

研究奨励交付金（若手奨励研究） 報 告 書

令和5度採択分
令和6年5月17日作成

研究課題名（和文）養護教諭の臨床判断能力向上のためのリカレント教育研修プログラム開発に関する研究

研究課題名（英文）Development of Recurrent Education Program for promoting the clinical judgment ability of Yogo Teachers.

研究代表者

氏 名 梶原 由紀子
福岡県立大学 看護学部・講師

研究組織

氏 名	所属研究機関・部局・職	役割分担（研究実施計画に対する分担事項）
梶原 由紀子	看護学部・講師	研究統括、調査実施・解析
松浦 賢長	看護学部・教授	研究全般に関する助言
原田 直樹	看護学部・准教授	調査・分析に関する助言
藤野 靖博	看護学部・講師	フィジカルアセスメント・オンライン研修に関する助言

研究奨励交付金（配分額）

179,090 円

研究成果の概要（当該研究期間のまとめ、できるだけ分かりやすく記述すること。）

多様な支援ニーズのある子供への対応ができる養護教諭の臨床判断能力向上のためのリカレント教育研修プログラムを開発し、その評価方法について検討した。先行研究や現職養護教諭からの意見を元にニーズの焦点を絞り、頭部の痛みに対するフィジカルアセスメントと運動時の初期対応についての研修計画を作成し、それぞれのテーマを専門とする講師と内容を検討し研修会の企画し実施した。実施後のアンケート結果では、役立ったと答えた割合は100%であり、今後の実践への活用への自信についても90%以上で活用できるとの回答であった。実施後のアンケート結果の自由記述からも、「自己の振り返りに繋がっていること」や「これからの執務に活用できる」などの意見もあったことから、本研修でのプログラムが養護教諭の臨床判断能力向上につながる研修の一助となるのではないかと考える。本研修プログラムの評価は事後アンケートのみとなっており、より自己評価につながるルーブリック評価等の作成や研修後の継続調査等も視野にいれ検討していく必要があると考える。更に、オンラインにおける技術研修の評価方法や高機能シミュレーター人形を用いた研修の評価方法等についても検討していくことが今後の課題と考える。

研究分野／キーワード

学校保健／養護教諭、臨床判断能力、リカレント教育

1. 研究開始当初の背景

申請者は、平成27年度科学研究費助成事業〔若手研究B：15k20814〕インクルーシブ教育における養護教諭の危機対応力向上に関する短期研修プログラム開発（研究代表者）において、養護教諭の危機対応力向上のための研修に関するニーズや支援策について検討し、短期研修プログラム開発を行った。危機対応に関する研修項目においては、自己研修でより学びを深めていくのに向いている項目と、校内研修として教職員と一緒に取り組むのに向いている項目としての示唆を得ている。

養護教諭が一人勤務であることや日々の校務の複雑化、日時や場所の条件により実質的な自己研修が難しい状況はあったが、昨今、オンラインでの研修会の開催も見られるようになり、自己研修の機会は依然に比べて身近になっている現状もある。さらに、オンデマンド研修の機会等も増えているが、一方でオンライン研修の評価に関する報告やシミュレーション教育を取り入れたオンライン研修に関する報告は見当たらなかった。

2. 研究の目的

多様な支援ニーズのある子供への対応ができる養護教諭の臨床判断能力向上のためのリカレント教育研修プログラムを開発するための基礎的研究である。昨今、現職の養護教諭への研修として、高機能患者シミュレーターを用いた教育プログラムの開発¹⁾²⁾等が行われており、臨床技能を高めるためにシミュレーション教育が行われるようになってきている。また、オンデマンドによる研修会も増えたことで、自発的な研修参加の機会も増えてきている一方で、それらを併用した研修についての報告はない。これまでの調査を行った結果と先行研究をもとに、養護教諭の臨床判断向上のための研修プログラムを作成し、養護教諭の臨床判断能力向上のためのリカレント教育に関するプログラムとその評価方法について検討することを目的としている。

3. 研究の方法

現役の養護教諭を対象とした研修会を企画・開催し、参加者への事後調査による評価及び参考資料や意見をもとに、養護教諭の臨床判断能力が向上するための研修プログラムを検討する。

1) 先行研究や文献等を用い「養護教諭の臨床判断能力」が必要となる場面について、学外の研究協力者に意見を聞き、「養護教諭の臨床判断能力向上のための研修会」のプログラムを検討するための要素を整理する。

2) 「養護教諭の臨床判断能力向上のための研修会」の企画、実施：研修会の内容の検討、講師選定、参加者募集、必要物品及び会場準備等

3) 「養護教諭の臨床判断能力向上のための研修会」終了後アンケート調査：研修開始前にアンケート調査への協力依頼についてアナウンスし、具体的な内容については、研修終了後、口頭とWeb上資料で説明する。研修会終了後にアンケートはGoogleフォームに回答してもらうことを説明する。回答後の同意撤回はできないことを説明する。

【アンケート調査内容】

(1) 基本情報：対象者の校種・年代・養護教諭経験年数

(2) 研修内容：研修Ⅰ・Ⅱの研修の満足度、同様の研修の受講経験、もっと聞きたい・知りたい事柄

(3) 研修運営：研修の時期や時間配分

(4) 自由記載：感想や気付いた点、(2) および(3) で記述できなかった事柄

4) アンケート調査実施期間

2024年3月20日～3月27日

5) アンケート調査分析方法

調査結果は、基本統計量を求め、単純集計を行った。

6) 倫理的配慮

対象者に、研究の概要、目的・方法、研究協力の是非によって不利益を被ることがないことについて口頭およびWeb上資料で説明する。もしも、回答の途中で気分不良などが起こった場合、その時点で速やかに回答を中止してもらい、必要があれば気分が落ち着くように休んでもらい、状況に応じて適切な大学教員が話を伺うことができることについて、書面に明記し口頭で説明する。また、調査結果は研究目的以外には使用しないこと、無記名式で個人が特定されないことを説明する。Webアンケートへの回答をもって、研究への協力が得られたこととすることも合わせて明記・説明する。なお、本研究の実施にあたっては、福岡県立大学研究倫理部会の審査承認を得て実施した。(承認番号2023年度-16号 令和6年2月27日)。

4. 研究の主な成果

1) 「養護教諭の臨床判断能力向上のための研修会」のプログラム検討

先行研究³⁾より養護教諭が、救急処置の必要性が「有」と判断した内容として、小学校では「すり傷」「頭・頭部以外の打撲」、中・高等学校では「頭痛」「かぜ様症状」が多いことが明らかとなっていたことから、このような場面におけるアセスメントでの困り感や可能性を考え系統的に見ているか等について、養護教諭である学外の研究協力者とのzoomによるオンライン座談会を行った。そこでは、フィジカルアセスメントやヘルスインタビューの重要性についての意見が出された。経験則で判断せずに、対象の状態を客観的に評価できるようなアセスメントシートのようなツールの必要性や、発達段階と状況に応じたヘルスインタビュー技術力が課題であることが共有された。

2) 「養護教諭の臨床判断能力向上のための研修会」の企画と実施

先行研究や座談会での意見を踏まえ「養護教諭スキルアップ研修会」の企画を行った。企画内容は、研修Ⅰとして「頭部の痛み（頭痛等）に対するフィジカルアセスメントの実践」について、基礎看護学でフィジカルアセスメントの講義を担当されている教員を講師に選定した。さらに、研修Ⅱとして、「児童生徒への運動障害時の初期対応 根拠に基づいたRICE処置」について、様々なスポーツ活動場面における医療班として活動され、またアスレティックリハビリテーションセンターの理学療法士としても活躍されている実践者を講師に選定した。プログラムの検討から得られた内容をもとにそれぞれ講師と打ち合わせを行いながら、講演と演習を取り入れた研修会を企画した。研修会は対面とオンラインでの参加も対象としたハイブリット形式で実施することとし、研修Ⅰについては、シミュレーターモデル人形を用いた演習を行うことから対面参加定員を20名と設定した。募集案内は、学校現場で養護教諭として勤務している卒業生の養護教諭や大学近隣の学校に勤務する養護教諭を中心にチラシの配布とメール等で参加を呼びかけた。また、本年度卒業した養護教諭として就職する学生へも参加を呼びかけた。研修Ⅰは対面参加14名（うち学生3名）、オンライン参加6名（うち学生3名）合計20名（うち学生6名）、研修Ⅱは対面参加17名（うち学生3名）、オンライン参加10名（うち学生3名）合計27名（うち学生6名）であった。

講義内容は、研修Ⅰでは、頭部の痛み（頭痛等）に対するフィジカルアセスメントについて、頭部の痛み（頭痛等）についての講義を受講後、児童生徒の事例で設定し作成したワークシートを用いてヘルスインタビューに関する個別演習とグループワークを実施した。意見の共有にはホワイト

ボードを用い、発表はグループ毎におこなった。オンライン参加者はzoomから参加していただき、講義はオンタイムでの受講とした。演習は個別演習でワークシートに取り組むこととし、情報共有の際にオンラインで意見等を追加してもらう等で参加を促していった。対面でのフィジカルアセスメント演習は視野観察や眼球運動、髄膜刺激症状の観察等をペアで実施した。さらに、シミュレーターモデル人形を用いて対光反射の確認や瞳孔不同の観察についての技術の確認を実施した。オンライン参加者には、演習を実施している様子の撮影を同時に視聴してもらい、各自で鏡等を使用しながら説明を行い、技術のポイントなどの確認を行う形で演習を行った。

研修Ⅱでは、児童生徒への運動障害時の初期対応について、子どもやスポーツ時におこる怪我の統計やその要因や機序、最新のRICE処置に関する情報などを中心に講義していただいた後、スポーツ中で怪我が起こった場面の映像を視聴し、怪我が起こりやすい場面や予防対策についても講義していただいた。更に、RICE処置については、冷却に使用する物品の適切な取り扱い方、圧迫の方法、冷却と圧迫の時間など治癒過程を考慮したRICE処置の実践について適切な物品を使用して技術演習を行った。オンラインの参加者には、演習時には実践演習を中心に視聴できるように撮影し、技術のポイントが確認できるよう声掛けを行いながら適宜視聴状況の確認を行った。

日時 2024年3月20日（水・祝）9：00 ～ 15：00

会場 福岡県立大学 午前：5号館2階5211講義室&ナーシングスキルラボ2

午後：5号館3階5301講義室

【タイムスケジュール】

8：40 ～ 受付

9：10 ～ 12：00 研修Ⅰ講義・演習・質疑応答

12：00 ～ 13：00 部屋移動・休憩

13：00 ～ 15：00 研修Ⅱ講義・演習・質疑応答

15：00 終了

3) 「研修会」終了後アンケート調査

終了後アンケート調査は、基本属性（対象者の校種・年代・養護教諭経験年数）、研修内容（全体を通しての研修の満足度や同様の研修の受講経験、研修内容、もっと聞きたい・知りたい事柄）、研修運営（研修の時期や時間配分）、自由記載の内容で行った。本アンケートへの回答は、学生を除いた参加者21名（研修Ⅰ：14名、研修Ⅱ：21名）を対象とした。回収率は16名（76.2%）であった。なお、研修Ⅰの回答は12名（85.7%）であり、研修Ⅱへの回答は14名（66.6%）であった。

研修Ⅰに関する満足度については、「とても満足」が10名（83.3%）「満足」が2名（16.7%）であった。また、役立つものであったかについては、「とても役立った」が12名（100%）であった。その理由については、「対光反射の確かめ方がよく分かった」、「自分の考えだけでなく、他者との意見を共有できたので、今回学べたことで再確認ができた」、「事例を通して丁寧にアセスメントすることができ、自分の対応を振り返ることができた」、「ヘルスインタビューから実際の対応まで順序だてて、根拠をもとに考えていくことができた」、「実際の執務にすぐに活用できそうだった」とあった。同様の研修の受講の有無については、受講したことがないが10名（83.3%）であった。研修の実践への活用への自信については、「とても活用できる」が10名（83.3%）、「ある程度活用できる」が2名（16.7%）であった。また他の教員への研修や保健教育に活用できる自信については、「とても活用できる」が5名（41.7%）、「ある程度活用できる」が6名（50.0%）、「どちらかと言えば活用できない」が1名（8.3%）であった。

研修Ⅱに関する満足度については、「とても満足」が8名（57.1%）「満足」が5名（35.7

%)、「ふつう」が1名(7.1%)であった。また、役立つものであったかについては、「とても役立った」が10名(71.4%)、「ある程度役だった」が4名(28.6%)であった。その理由については、「テーピングの技術が分かった」、「最新の知見を学べる機会となった」、「日常の中で行っている処置であり、最新の情報をふまえ再確認することができた」、「演習もあり体験的に学ぶことができた」、「中体連の大会の際に実践できそうだった」等があった。同様の研修の受講の有無については、「受講したことがない」が14名(100%)であった。研修の実践への活用への自信については、「とても活用できる」が7名(50.0%)、「ある程度活用できる」が6名(42.9%)、「どちらともいえない」が1名(7.1%)であった。また他の教員への研修や保健教育に活用できる自信については、「とても活用できる」が6名(42.9%)、「ある程度活用できる」が7名(50.0%)、「無回答」が1名(7.1%)であった。

研修の運営について、開催時期は「適切でない」が1名(6.3%)であり、その理由として年度末以外での開催を希望していた。また、研修の時間配分では「適切」が16名(100%)であった。自由記述では、「実際の場面をイメージしながら考えることができた」、「今後も参加したい」「もっとモデル人形を活用した実技演習を行いたい」、「学びに帰って来れる場所が有難い」等の記載があった。

5. 考察

1) 養護教諭のリカレント教育研修

本研究において、先行研究でのニーズ調査結果と現場の養護教諭が必要と思うニーズに焦点をあて、養護教諭の意見を元に研修内容の検討を行うことができたことは、学校教育から離れた後も、それぞれのタイミングで学び直し、仕事で求められる能力を磨き続けていく⁴⁾というリカレント教育としての位置付けになったのではないかと考える。

文部科学省より令和5年1月17日に報告された「養護教諭及び栄養教諭の資質能力の向上に関する調査研究協力者会議」議論の取りまとめ⁵⁾において、養護教諭に担うことが求められる職務について整理されており、養護教諭が校内の中心的な役割を果たすべきものとして、救急処置、健康診断、疾病の管理・予防、心身の健康課題に関する児童生徒への健康相談、健康相談等を踏まえた保健指導、保健室経営とされた。また、他の教職員との役割分担の中で適切な役割を果たすべきものとして、健康観察、学校環境衛生管理、各教科等における指導への参画が分類された⁵⁾。救急処置(緊急事態への対応)に関する内容では、養護教諭が救急処置をはじめとした緊急事態への対応に関わる校内研修においては、専門性を生かし校内研修の企画・実施を積極的に主導していくことが求められている⁵⁾。

一方で、筆者らが、2019年に実施した危機対応に関する研修についての調査⁶⁾では、日々の業務の中で養護教諭が取り扱うことが多い危機対応の内容に関しては、知識・技術があると回答されていたものの、研修の受講無で知識・技術無の項目として「職員への研修方法」「養護診断研修」等の項目があげられていた。今回、実施後のアンケート結果において、「他の教員への研修や保健教育に活用できる自信」への質問項目において9割が「活用できる」と回答していたことから、養護教諭に求められる能力のブラッシュアップの一助を担うことができ、リカレント教育研修として実施できたのではないかと考える。

2) 養護教諭の臨床判断能力向上のための研修会

文部科学省(2023)における議論の取りまとめ⁵⁾の救急処置に関する記載の中には、「学級担任等が救急処置を行う場合であっても、基本的には、養護教諭が学級担任から引き継ぎ、その専門性を生かして、症状等の見極めや医療機関への受診の要否の判断といった対応を行うこと」が述べられ

ている⁵⁾ように、養護教諭はその職務として救急処置を行っており、子どもの傷病に対して臨床判断をおこなっている⁷⁾。養護教諭の臨床判断について、葛西ら（2019）⁷⁾は、養護教諭の臨床判断のモデルとして、【コミュニケーションスキル】【コンクテスト】【気づき】【解釈】【反応】【省察】を示しており、臨床判断に関する項目としても58項目あげている。

今回、作成した養護教諭の臨床判断能力向上のための研修の内容は、頭部の痛み（頭痛等）に対するフィジカルアセスメントや運動障害時の初期対応に関するものであった。研修内容は、頭部の痛みを踏まえたバイタルサインやヘルスインタビュー、症状観察のポイントとその技術について、講義やワーク（個別・グループ）と技術演習を通して学ぶことができるよう企画していた。実施後のアンケート結果より、研修の実践への活用への自信については、研修Ⅰの質問に回答した12名のすべての養護教諭が「活用できる」と回答しており、研修Ⅱの質問への回答は約9割の養護教諭が「活用できる」と回答していた。更に、自由記述からも、「ヘルスインタビューから実際の対応まで順序だてて、根拠をもとに考えていくことができた」「対光反射の確かめ方がよく分かった」等の回答があった。これは、葛西ら（2019）⁷⁾の臨床判断に関するモデルの【コミュニケーションスキル】【気づき】【解釈】にある項目に該当する内容として考えることができ、また、「テーピングの技術が分かった」「実際の執務にすぐに活用できそうだった」「中体連の大会の際に実践できそうだった」と等の回答は、同モデルの【反応】にある項目に該当するのではないかと考える。このような結果を踏まえ、本研修のプログラムが養護教諭の臨床判断能力向上につながる研修の一助となるのではないかと考える。今後の課題として、本研修プログラムの評価は事後アンケートのみとなっており、より自己評価につながるルーブリック評価等の作成や研修後の継続調査等も視野にいれ検討していく必要があると考える。更に、オンラインにおける技術研修の評価方法や高機能シミュレーター人形を用いた研修の評価方法等についても検討していきたいと考える。

〈引用文献〉

- 1) 福田博美他. (2017). 養護教諭のための高機能患者シミュレーターを用いた教育プログラムの開発 - 現職養護教諭における緊急時の脈拍観察に関する研修の提案 -. 弘前大学教育学部紀要 第118号 p141 - 148.
- 2) 林さえ子他. (2019) 養護教諭養成課程における臨床判断能力を育成するシミュレーション教育プログラムの提案と評価. 愛知教育大学研究報告. 教育科学編 (68) 37-44.
- 3) 日本学校保健会. (2018). 保健室利用状況に関する調査報告書 平成28年度調査結果.
- 4) 厚生労働省. https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_18817.html (2024. 5. 16閲覧)
- 5) 文部科学省 (2023). 養護教諭及び栄養教諭の資質能力の向上に関する調査研究協力者会議 議論の取りまとめ. 令和5年1月17日.
- 6) 梶原由紀子他. (2022). 養護教諭の危機対応に関する研修についての調査研究. 福岡県立大学看護学研究紀要 第19巻 p57-68.
- 7) 葛西敦子他. (2019). 養護教諭の臨床判断に関する測定用具の開発. 弘前大学教育学部紀要 第121号 p157-166.

5. 主な発表論文等

九州思春期研究会雑誌への投稿予定

6. その他の研究費の獲得

科学研究費補助金(基盤研究(C))「養護教諭の協働力を促進するための研修プログラム開発」